

マーキング調査では、調査区Aで捕獲した245個体（目視で確認された個体の47%）に対し、翅に油性ペンで個体識別番号を記入して放虫した。再捕率は時期により変動が見られたものの、調査期間全体を通じた再捕率は21.0%であり、定着性が高いとされるアオイトトンボと同程度⁴であった（表2）。

表2 調査区Aでのマーキング調査

	月 6			7						8						9						10			11			合計
	日	21	7	20	2	12	16	23	25	30	6	13	14	20	23	28	4	12	21	3								
総捕獲数	3	4	2	3	4	8	7	8	20	34	32	17	35	32	35	38	20	6	2	310								
再捕数	0	0	0	0	0	0	2	1	1	2	3	11	6	14	11	8	4	2	0	65								
再捕率(%)	0	0	0	0	0	0	29	13	5	5.9	9.4	65	17	44	31	21	20	33	0	21.0								

再捕数はその調査日以前にマークされた個体が再捕されたもの。総捕獲数から再捕数を引いたものが、調査日にマーキングした個体数となる。

一方、福田川の調査区Fおよび山田川の調査区B~Eでは、調査区Aでマーキングされた個体は確認されなかった（表3、表4）。この結果は、本種の長距離移動が限定的であり、主に局所的な範囲で活動している可能性を示唆している。また、調査区B~Eでマーキングした92個体のうち、隣接する調査区Bで9月6日にマーキングされた3個体のみが調査区Aで再捕された。さらに、調査区Aを上流域と下流域に分

けて個体の移動を解析した結果、245個体中、上流から下流

へ移動した個体は4個体、下流から上流へ移動した個体は3個体であり、計7個体のみが移動していた。これらの移動個体数の少なさからも、本種の局所的な定着傾向が裏付けられた。

再捕された個体のうち、最長でマーキングから33日後に再捕された例があったが、多くの個体は2週間以内に再捕されなくなった（図3）。シオカラトンボによる捕食が確認されており、他のトンボによる捕食が関与している可能性もある。また、他地域への移動の可能性も否定はできないが、再捕されなくなった明確な要因は不明である。

まとめ

山田川におけるベニトンボは、5月下旬から11月初旬にかけて出現し、秋には優占種となるほど多数が確認された。再捕率は21.0%と比較的高く、調査区間間および調査区内での移動個体数は少なかった。また、一部の個体は最長で33日間同一地点にとどまっており、これらの結果から本種の強い定着性が示唆された。一方で、滞在期間には個体差が見られ、シオカラトンボなどによる捕食や他地域への移動³など、複数の要因が関与している可能性も考えられる。今後はヤゴの確認を通じて、本種が当該地域で再生産しているかどうかを明らかにする必要がある。

参考文献

- 1) iNaturalist ベニトンボ <https://www.inaturalist.org/places/Japan> (2024年10月1日閲覧).
- 2) 琵琶湖博物館でトンボ保全活動展示 滋賀で確認された102種を紹介 琵琶湖大津経済新聞. <https://biwako-otsu.keizai.biz/headline/2956/> (2026年2月8日閲覧).
- 3) 片谷直治・片谷俊彦(2025) 奈良県五條市・大淀町におけるベニトンボ標識調査, *Aeschna*, 61, p23-30 61, p23-30.
- 4) 一ノ瀬友博・森田年則・石井潤, 兵庫県淡路島のため池におけるトンボ類の標識調査, 2006年度農村計画学会学術研究発表会要旨集 51-52, 2006.

表3 福田川(調査区F)での目視調査

調査日	7月29日	8月12日	8月25日	9月5日	9月6日	10月18日	10月24日	11月3日
個体数	0/0	0/0	0/1	0/13	0/3	0/16	0/2	0/0

マークされた個体の数/目視確認数

表4 調査区B~Eでのマーキング調査

調査日	調査区 B	C	D	E	合計
8月23日	0/1	0/5	0/2	0/0	0/8
9月6日	0/23	0/25	0/10	0/3	0/61
9月28日	0/3	0/12	0/8	-	0/23

マークされた個体の数/捕獲数

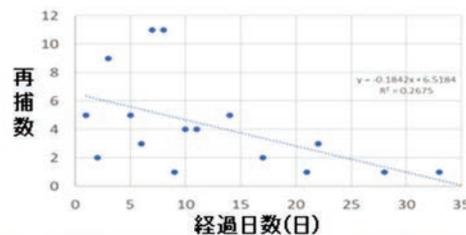


図3. 調査区Aにおける放虫後の経過日数と再捕数の合計 (245個体マーキングし、68回再捕獲された(2回以上含む)。再捕獲までの日数と捕獲数に強い相関はみられなかった。